

令和元年6月27日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03527

研究課題名(和文) 日本における近代初期海図の集成と東アジア海域における西洋海図との相互関係

研究課題名(英文) Mapping the waters of East Asia in the 18th and 19th centuries

研究代表者

鳴海 邦匡 (NARUMI, Kunitada)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：00420414

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、(1)旧日本海軍水路部が作成した明治期の海図と水路誌の意義を理解するために、(2)19世紀の東アジア海域における西洋製海図の整備過程を解明し、(3)日本と西洋の海図における関係を明らかにすることである。これら3つのテーマを検討するために、海外では米議会図書館、米国立公文書館、大英図書館、英国立公文書館、国内では国会図書館、国立公文書館での調査を主に実施した。また、直接的な研究報告としては、学会発表4件、雑誌論文2件、図書1件を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究のテーマとした東アジア海域における近代海図の整備過程は、これまで議論の蓄積の乏しい領域であり、その探求の意義は大きい。特に報告を重ねた長久保赤水による日本図の西洋における受容過程の評価は、日本の地図史に新たな知見をもたらすもので重要である。テーマを探るべく複数の機関で資料調査を実施したが、その多くがこの方面の調査が実施されてこなかった。今回の調査を通じて新に見出したデータも多く、早急にその報告を行う必要があると考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the mapping of East Asian waters from the 18th century to the 19th century. For that purpose, we worked to get a whole picture of the charts and pilots made by the Western and Japan hydrographic offices. In this time, we surveyed the Library of Congress, The U.S. National Archives, the British Library, The National Archives United Kingdom, the National Diet Library(Japan), and the National Archives of Japan. During this study, we conducted four conference presentations and two papers related to the research theme.

研究分野：人文(歴史)地理学的な関心からアプローチした地図史

キーワード：海図 地図の近代化 東アジア海域 18世紀 水路部 地図の文化交流

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

地図は地理学の基本資料のひとつであるが、日本におけるこれまでの地図史研究は近世以前の資料に関心を寄せたものが多く、近代以降については乏しいのが実情といえる。こうした動向において、近年、研究メンバーである小林茂(大阪大学・名誉教授)が中心となって進める「外邦図」研究プロジェクトは、地図と戦争という枠組から、近代以降の地図の作成プロセスに関心を寄せたものとして注目される。ただし、これらの研究は旧日本陸軍(陸地測量部)による陸上の地図を中心とするものであり、旧日本海軍(水路部)による海図への関心は乏しい。

明治となった日本では、領土の確定をめぐる交渉に迫られるとともに、台湾出兵、江華島事件など、周辺の海域に赴くための準備として早急な海図の準備が求められるようになった。しかし、明治の早い段階では、日本海軍水路部が独自に海図を整備できる状況になく、西洋製の海図や水路誌などに頼ることとなった。このことは、明治初期の日本の海図を理解するには国内での整備プロセスとともに、東アジア海域で先行する西洋製海図の整備プロセスを理解する必要があることを示すといえる。

こうした状況の理解から、明治前半期における海図の重要性を知ることができるが、十分な資料目録すら整備されていない状況となっている。その要因のひとつとして、関心が陸の地図に偏っていたこともあるが、旧水路部所蔵資料の大半が関東大震災によって焼失してしまったことも挙げられる。近年、海洋情報部倉庫や東京大学赤門倉庫から明治初期海図を含む資料が相次いで発見されたが、全容の理解までには至っていない。

ところで外邦図資料は、敗戦時に廃棄されたり、GHQ等を通じて接収された場合も多く、国内にまとまった資料群を形成し難い状況といえ、これまでの調査からこうした資料が米国の政府系アーカイブ機関(米議会図書館、米国立公文書館)に多く所蔵されることが分かった。そのうえで代表の鳴海は、平成24年3月からの半年間、米議会図書館に短期研究者の身分を得て滞在し、主に地理地図室で日本関連地図の全体調査を実施して旧日本海軍水路部による海図の存在を見出すとともに、1800年代の西洋製海図(主に英国水路部)についても数多く所蔵することを確認した。

このような経緯を踏まえ、国内における明治初期海図の所蔵状況の限界を克服するうえで、海外に所蔵されるコレクションに注目するのが本研究の特色といえる。本研究では、米議会図書館と米国立公文書館に加えて、中心的な役割を担う英国水路部製の海図を調べるために大英図書館と英国国立公文書館の調査も有益と予想する。

### 2. 研究の目的

上記の状況において、明治初期に旧日本海軍水路部が作製した海図と水路誌の評価とその役割を理解するために、18世紀末から19世紀にかけての東アジア海域での西洋製海図の整備過程と、日本製海図との関係を明らかにすることが研究の目的である。具体的には以下のテーマを予定する。

- (1) 旧日本海軍水路部が作成した明治初期海図の全容を把握するための調査研究
- (2) 18・19世紀の東アジア海域における英米仏露国製海図の全容を把握するための調査研究
- (3) 日本水路部作成の初期海図と関係する西洋製海図の比較

### 3. 研究の方法

研究の主な方法は、まずそれぞれの資料群の全容を明らかにするための調査を実施することである。主な調査先として、海外では、米議会図書館、米国立公文書館、大英図書館、英国国立公文書館を予定しており、現地で海図を中心とする資料調査を行う必要がある。また、国内においては国会図書館、国立公文書館での調査を主に予定している。特に調査を予定する海外の資料群は、これまで十分な調査が行われていないことから、明らかとなった資料については、目録を整備し、積極的な情報提供を進める必要があると考えている。

調査は図毎の調書作成と撮影を基本とする。調書を作成するのは、調査資料の多くが全容の揃っていないものが多く、基礎作業として目録を整えるためである。特に海図は図版が頻りに更新される特徴があり、分析のうえでその版の違いを確認する必要がある。それは海図を比較する際、どの時点の版の海図を参照したかが重要になるからである。また調査時の撮影は、デジタル一眼レフカメラでの撮影を基本とするが、必要なものについてはスキャンによる撮影を依頼する予定である。ただし、大型スキャナによる複写の依頼は費用がかかるため、可能な限り自分達で撮影する必要があると考える。

### 4. 研究成果

研究の基礎となる資料調査を、以下のスケジュールで実施した。

#### 【2016年度】

##### 海外調査

2016年9月4日～19日および2017年3月2日～18日(鳴海・小林) 米国のワシントンDCに位置する米議会図書館に所蔵される日本海軍水路部製や英国水路部製の海図を主に調べたほか、米仏露国製の海図についても調査を実施した。

##### 国内調査

2016年11月18日～20日（鳴海・塚本）東京の国立公文書館に所蔵される旧日本海軍水路部作製の明治初期海図の調査を実施した。  
2016年12月13・14日および2017年3月21・22日（鳴海）東京の国立公文書館および国会図書館に所蔵される旧日本海軍水路部作製の明治初期水路誌の調査を実施した。  
2016年2月、関連資料として旧日本水路部作成の海図などを古書店より購入し、調書を作成のうえ目録を作成した。

#### 【2017年度】

##### 海外調査

2017年9月7日～27日（鳴海・小林）米国のワシントン DC における米議会図書館と米国立公文書館にて日本と西洋による 19 世紀の海図、ハーグ（オランダ）の王立図書館にてティチングの作製の赤水図の地名翻刻リストなどを調査した。  
2016年3月～2017年12月、米議会図書館所蔵の旧日本海軍水路部製の海図の全容を把握するための悉皆調査を現地のアルバイトを雇用して実施した。なお目録の整備（13000点以上）は2018年度にほぼ終了した。  
2018年3月7日～16日（鳴海・塚本）米国のワシントン DC における米議会図書館と米国立公文書館にて、戦前の旧日本海軍水路部作製の海図と 19 世紀にアメリカ水路部の作製の海図の原図などを調査した。また、米議会図書館で実施していた旧日本海軍水路部作製の海図の悉皆調査を引き続き実施し全点の調査を終えた。

##### 国内調査

2017年10月27日～29日（鳴海）高萩市文化会館にて学会発表 を行うとともに、千葉県伊能忠敬記念館にて調査を実施した。  
2017年12月25日～27日および2018年2月25日～28日（鳴海）東京の国立国会図書館にて旧日本海軍水路部作製の明治期の水路誌を調査した。

#### 【2018年度】

##### 海外調査

2018年8月26日～9月13日および2019年3月26日～31日（鳴海・塚本）米国のワシントン DC の米議会図書館と米国立公文書館で資料調査を実施した。米議会図書館では西洋製海図（英国など）と日本海軍水路部が作製の海図（GHQ 接收資料）の調査を行い、米国立公文書館では、北太平洋測量艦隊（ペリー、ロジャーズなど）による海図（原図も含む）の調査を実施した。  
2018年9月18日～28日（鳴海・小林）英国ロンドンの大英図書館にて英国水路部製海図やクラブロート作成の地図など、また、仏国パリの仏国立図書館にて長久保赤水による日本図の調査を実施した。  
2019年3月10日～19日（鳴海・塚本）英国ロンドンの大英図書館にて主に英国水路部製海図の調査を、英国立公文書館にてプロートン製の手描き海図と幕府より英国水路部に提供された伊能図の調査を実施した。

##### 国内調査

2018年6月15日～16日（鳴海・小林）茨城県古河歴史博物館にて高見泉石資料の調査を実施した。  
2018年7月26日～28日（鳴海）東京の国立国会図書館にて日本水路部製の明治期の水路誌の調査を実施し、この調査については、ほぼ作業を終えることができた。

上記の調査をもとに以下の成果をこれまで報告した。

#### 【2016年度】

2016年11月開催の人文地理学会において、「長久保赤水の日本図と英国海図」(学会発表 )と題した発表を行った。これは研究目的(3)の成果のひとつである。また、2017年2月刊行の『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』(図書 )では、例えば、代表の鳴海は「清國二十萬分一圖と英国海図」と題したコラムのなかで、英国水路部作成の海図の調査データを分析し報告を行った。これは研究目的(2)および(3)の成果のひとつである。

#### 【2017年度】

2017年6月に愛知教育大学で開催された歴史地理学会において、「明治初期海図・水路誌の整備過程と対外関係」(学会発表 )と題する発表を行った。これは主に研究目的(1)の成果である。また、2017年9月にオランダのライデン大学図書館主催のシンポジウム「Mapping Asia: Cartographic Encounters between East and West」において、「The utilization of Japanese early modern maps by Western cartographers during the nineteenth century: A new example」(学会発表 )と題する発表を行った。これは研究目的(3)の成果である。さらに、2017年10月に茨城県の高萩市文化会館で開催された歴史地理学会例会において、「ロシアと英国の海図に反映された長久保赤水日本図」(学会発表 )と題する報告を行った。これは研究目的(2)および(3)の成果である。この歴史地理学会例会は高萩市主催による長久保赤水生誕300年

記念事業パネルディスカッションとしても開催されたものであった。

#### 【2018年度】

主に研究目的(3)の成果として、雑誌『地図』に「ヨーロッパにおける長久保赤水の日本図の受容過程」(雑誌論文)と題する論文を発表した。また、昨年度の実施した学会発表については、シンポジウムのプロシーディングス誌に「The Use of Japanese Early Modern Maps」(雑誌論文)と題する論考として掲載された。

以上が、本科研における調査および研究として、2016年度から2018年度の期間に実施した成果である。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計16件)

Narumi, K. and Kobayashi, S. The Use of Japanese Early Modern Maps. In: Storms, M. et al. (eds.), *Mapping Asia: Cartographic Encounters Between East and West*. Springer, 2019, pp.169-183 (査読有)

小林茂、日中戦争・第2次世界大戦期の日本軍の気象観測とデータレスキュー、天気、査読有、66巻2号、2019、pp.113-140

後藤敦史、幕末の政治史を語る堺台場:政治的な"象徴"という視点から、大阪春秋、査読無、46巻4号、2019、pp.16-21

小林茂・鳴海邦匡、ヨーロッパにおける長久保赤水の日本図の受容過程、地図、査読有、56巻4号、2018、pp.1-17

鳴海邦匡、学会展望:地図、人文地理、査読有、70巻3号、2018、pp.410-413

後藤敦史、「明治150年」を考える(2)異国船はなぜ日本に来たか:イギリス測量艦アクタイオン号を事例に、歴史学研究、査読無、973号、2018、pp.39-47

後藤敦史、安政元年の下田休息所問題と阿部正弘政権、女性歴史文化研究所紀要、査読無、26号、2018、pp.51-64

後藤敦史、書評 佐野真由子著『幕末外交儀礼の研究:欧米外交官たちの将軍拝謁』、歴史学研究、査読無、950号、2017、pp.73-81

後藤敦史、幕末期対外関係史研究の現在、歴史評論、査読無、795号、2017、pp.98-102

谷端郷、村中亮夫、塚本章宏、花岡和聖、磯田弦、山奈宗真著『岩手沿岸古地名考』の書誌学的検討と内容分析、歴史地理学、査読有、59(2)、2017、pp.27-42

村中亮夫、谷端郷、塚本章宏、花岡和聖、磯田弦、津波地名やその由来は継承されるのか?:山奈宗真著『岩手沿岸古地名考 全』の追跡調査、地理科学、査読有、72(4)、2017、pp.223-246

小林茂、「支那事変」時における「第三国」側の被害届:アジア歴史資料センター資料から、近代東アジア土地調査事業研究、査読無、8号、2017、pp.33-39

後藤敦史、幕末外交と日本近海測量、歴史学研究、査読有、950号、2016、pp.73-81

平井松午、塚本章宏、田中耕市、根津寿夫、徳島城下町の構造と変遷:城下絵図のGIS分析、第22回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」発表論文集22、2016、pp.43-50

塚本章宏、GISを用いた近代京都出版図の構図と類型の分析、地理情報システム学会講演論文集(CD-ROM)2016

鳴海邦匡、新板増補大坂図・文政新改撰州大坂全図、地理、査読無、738号、2016、pp.90-91

[学会発表](計8件)

小林茂、鳴海邦匡、ロシアと英国の海図に反映された長久保赤水日本図、歴史地理学会例会(高萩市文化会館)2017年10月28日

小林茂、近代日本の気象観測網の拡大と中国沿岸気象サービス、2017年度日本地理学会秋期学術大会(三重大学)2017年9月29日

小林茂、第二次世界対戦期の東アジア・東南アジアにおける日本軍・連合軍の気象観測:データレスキューの視点から、2017年度日本地理学会春期学術大会(筑波大学)2017年3月29日

Kunitada Narumi・Shigeru Kobayashi, "The utilization of Japanese early modern maps by Western cartographers during the nineteenth century: A new example", *Mapping Asia: Cartographic Encounters between East and West*(Leiden University Library), September 15, 2017.

鳴海邦匡、小林茂、明治初期海図・水路誌の整備過程と対外関係、2017年度歴史地理学会(愛知教育大学)2017年6月18日

平井松午、塚本章宏、田中耕市、根津寿夫、徳島城下絵図のGIS分析、2016年度日本地理学会秋季学術大会(東北大学)2016

谷端郷、村中亮夫、塚本章宏、花岡和聖、磯田弦、津波の教訓を伝える地名の行方、2016年度日本地理学会秋季学術大会(東北大学)2016年10月1日

小林茂、鳴海邦匡、長久保赤水の日本図と英国海図、2016年度人文地理学会大会(京都大学)2016年11月13日

〔図書〕(計4件)

後藤敦史ほか、戎光祥出版、幕末の大阪湾と台場、2018、286

塚本章宏、鳴海邦匡ほか、丸善書店、日本都市史・建築史事典、2018、670

後藤敦史、講談社、忘れられた黒船：アメリカ北太平洋戦略と日本開国、2017、304

小林茂、鳴海邦匡ほか、大阪大学出版会、近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図、2016、266

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：小林茂

ローマ字氏名：(KOBAYASHI, shigeru)

所属研究機関名：大阪大学

部局名：文学研究科

職名：名誉教授

研究者番号(8桁)：30087150

研究分担者氏名：塚本章宏

ローマ字氏名：(TSUKAMOTO, akihiro)

所属研究機関名：徳島大学

部局名：大学院社会産業理工学研究部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：90608712

研究分担者氏名：後藤敦史

ローマ字氏名：(GOTO, atsushi)

所属研究機関名：京都橘大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：60710671

(2)研究協力者：なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。